



早稲田ヨットクラブ

# 会報

第15号

昭和59年1月 発行  
 発行所 事務局 舟岡 正  
 編集・広部 石田 晋也  
 編集 松島 弘行  
 会費振込先 第一勧業銀行 日本橋支店  
 普通預金 二四四五七二九  
 口座番号 二四四五七二九  
 ワシントンヨットクラブ 杉山博保

## 明けまして

### おめでとうございませす

#### —58年度の反省と59年度の抱負—

理事長 杉山博保

あけましておめでとうございませす。本年もOB皆様方のご協力をお願い申し上げます。

昭和五十八年は、ヨット部創立五十年の年でもあり、部史編纂の大事業に取り組まれた中塚委員長他編纂委員の努力により、近來まれにないクラブ活動の盛り上りが生れました。

五十年史の完成は当初の予定より約半年遅れ、今春になりそうですが協力いただいておりますOB各位に対し、改めて感謝申し上げます。

さて五十八年度のクラブ活動は、理事長以下役員との期継続と一部の理事交替が一月のOB総会で決定されました。理事一同、要請された方には学生時代お世話になったOB諸兄とヨット部の為に微力ながら尽くそうと誓い合った次第で、前年と同様、毎月一回の定例理事会を丸ノ内・永楽倶楽部で開き運営して参りました。

クラブの健全な発展を委嘱された私共

にとりやり遂げるべき第一の問題は、安定した資金調達とその適正配分でありませす。

資金調達は現在の処、OB諸兄の懐当にせざるを得ないのですが、会員数四百名を擁する早稲田ヨットクラブとしては、もし毎年全会員が年会費を納入して下されば、非常に運営が良好になり、今までのように一部OBの過度の負担に頼る事なく充実したクラブ活動が計れると思ひます。この資金調達は、運営に当る我々の努力と、会員諸兄のご協力が一致して始めて可能であります。若干ではあります。居ります。

クラブ運営の目的のうち、次に大切なことは早稲田大学ヨット部へのバックアップであります。

わがヨット部は、全日本インカレの優勝を狙える部として、地盤沈下の激しい早稲田大学体育局各部の中で上位にラン

クされていきます。五十八年度は早慶戦を始め連戦連勝で、江の島の全日本インカレに期待して居りましたが、残念ながら三位に終りましたものの、近年の活躍振りには我々OBを元気づけるものであります。しかし、彼等に対するクラブの援助は未だ充分とは云えず、昨年度も又、学生諸君の長期間のアルバイトと各OBの個人的な援助によって、なんとかやり繰りして来たのが実情であります。

又、五十八年度よりの試みとして『秋季例大会』を開催する事を決定しました。OB諸氏が一同に会する機会が、年一回のOB総会のみでは少な過ぎるのではないかと、理事会の提案もあり、更に大変悲しく淋しい事でありませすが、物故者の方々も増えてまいりました。

ご遺族の方々にはOB総会へお呼び致して参りませんでしたので、クラブとの繋りをご本人が亡くなられると同時に途絶えてしまうのが今迄の現状でした。何等かの型でヨットクラブと接触を持ちたいと思っておられる方々もいらつしやると思ひ、秋の例大会には皆様にもご通知



を委上げ、出来るだけ繋りが絶えないようにして行きたいと思つて居ります。又、より楽しい会とするためにOB諸兄だけではなく、ご家族・親しい方々のご同伴もお願いする積りであります。

昨年度は第一回の試みでしたのと、連絡不備等で皆様にはご不満の点もさぞ多かつたかと思ひませすが、年毎に充実した楽しい会に持つて行く積りで居りますので、是非皆様のご協力をお願い致します。

このように反省してみれば何もかも不十分の様ですが、実感として五十八年度をとらえてみますと、除々にではありませすが早稲田ヨットクラブの基礎が固まりつつあると思ひませす。

五十九年度は、待望の五十年史の完成と五十年記念パーティーが前半の大事業であり、更に早慶戦・全日本インカレの優勝への援助と応援であります。秋には、早稲田が当番である四大学のOB戦の開催と、秋季例大会の定着化が我々の課題となると思ひませす。

いずれもOB諸兄のご援助が必要でありますので、どうかよろしくお願い致します。

本年度の理事会も昨年度に増して、理事諸氏の献身的なご協力を得て進めて行きたいと思つて居ります。理事会は毎月第二木曜日、永楽倶楽部で例会を開いてあります。昨年は理事以外OBの皆様も多数出席して下さる様になり、従前にも増し賑やかで盛り上りを見せて居ります。ぶらつと来て、皆でヨットの話をする位の気軽な気持ちで皆様も是非参加してみたい。

OB諸兄のご健康とご繁栄をお祈り致します。今年もよろしくお願い致します。

# 第48回・全日本インカレ観戦記(江の島)

監督 加藤 文生

第49回、第50回関東インカレを連続制覇し名実と共に東関No1のチームとして部員の志気は上り、先輩諸氏の期待に答えるべく三戸浜の地で練習につぐ練習を重ねた。弱点とみられた精神面の強化もはば出来、我々は8月20レース海面である江ノ島に乗り込んだ。

レースは8月25日から始まり、七回戦の予定で四七〇・S級共全国九水域から選ばれた各級二十三校、六九艇によって熱戦が繰広げられた。

早稲田チームのメンバーは四七〇級に佐々木④・小田④組、小山③・松本④組、入江②・三好④組、S級に市井④・和田③組、小野④・瀬川③組、坂東④・瀬戸②組とベストメンバーで臨んだ。

## 第一レース

早稲田にとって頼ってもない南の強風約8米。天が与えて呉れた神風であったが、S級は大会の雰囲気から飲まれてしまったのかトータル85点、考えていたより悪い成績。四七〇級は優勝ペースの48点。

## 第二レース

引き続きの強風の中ブローは12米を越える。二戸浜と違って波長が長く、各校波に悩まされ沈艇続出。関東水域以外ではS級で同志社、関学が伝統にものを言わせ健闘。前年度優勝の立命館、京大の近畿北陸勢や優勝候補と言われた福岡大も強風の中ではセーリングもまままならず自滅。早稲田はS級でもち直しての51点。四七〇級も良しとする63点で第一日を終えたが、S級で

日大の好走が目立ちダントツの首位。四七〇級は早稲田は接戦の中で三位。

## 第三レース

二日目は前日と打って変わっての南の軽風。小柄な早稲田が近年得意とするコンディション。S級は今迄の最高の47点。四七〇級も良く走り49点。第三レースが終った時点で長い間待ちに待った首位に飛び出す。今大会よりコンビユーターを使って成績を発表している為迅速である。小沢会長―大会委員長でもある私と手を取り合って喜ぶ。小沢さんは嬉しそうに四七〇級の早稲田一位を協会、新聞社に電話で報告をする。

## 第四レース

やはり南の軽風。ようやく調子の波に乗り掛った早稲田の野望を打ち砕くかのやうに日大四七〇級陣が、全日本四七〇級レース史上初の、二、三位と言う快挙を成し遂げようとは。実力では早稲田が劣っているとは思えないが、この出来具合敵ながら立派の一言につきる。早稲田もよく頑張る44点は今迄の最高得点。従来の優勝校の得点ペース以上であった。

## 第五レース

三日目。真夏だと言うのに終始北の弱風。点差は僅か38点。波に乗った日大四七〇級を何とか追い落すべく好走し最高の37点。だが調子に乗った日大勢も強いのを江ノ島は彼等のホームポイント。全艇シングルの15点。万事休すか? S級も日大には離されたが実力通りの力を發揮している。

## 第六レース

我が四七〇級勢は起死回生の一発をねらったが、裏に出ての89点。日大益々好調にオールシングルの10点。S級は32点の第六レースでは日大を抑えての一位の得点。

## 第七レース

最終レースは八月二十八日で日曜日。前の晩から大勢のOBが応援に駆けつけて下さる。石井、米田晴、安藤、浜田、岩木、舟岡、藤井達、大嶋……の各氏。稲龍を觀覧船に仕立てての大応援も空しく、レース海面は無風状態で結局ノーレース。永かった一年間が今日、ここに終る。全日本優勝を目指しヨット部部長達は良く苦しい練習に負けず頑張ってくれた。成績こそ昨年の彦根と同じの総合二位ではあったが着実に力は向上している。

再度監督を引き受けて十年、先輩諸兄の力強い応援を受け、学生と共に努力して来たが全日本優勝の美酒には有つく事が出来なかつた。過去何年間も下級生が艇を持ち、上級生がクルーをやったりして部員が全日本制覇と言う一つの目的に向って行く、このチームワークの素晴しさは他校に無いものがある。

関東インカレに連勝。早慶戦四連勝。全日本インカレ二年連続二位と言う輝かしい実績が示すように今春からの新チームが必ずやこの無念を晴らしてくれることと信じます。最後になりましたが、OB各位、小松コーチ、そして若手OBの情熱に紙上をお借りして心からお礼申し上げます。58年度全日本インカレ総合成績

- ①日大 ②明大 ③早稲田 ④京大
- ⑤立命館 ⑥福岡大
- 四七〇級成績 ①日大 ②明大 ③早稲田 ④滋賀大 ⑤成城大 ⑥中央大
- S級成績 ①日大 ②同志社 ③明大 ④早稲田 ⑤法政大 ⑥関学

## ◎五十年史編纂経過報告

中塚編集委員長を始め各委員は、昨年中は海、ゴルフ、はては酒を飲む時間まで惜んで編纂をしてまいりました。当初の計画では、昨秋に刊行する積りでございましたが現在の状況では六、七ヶ月程延びそうです。OB諸氏からの原稿の切りは七月末とした為、七月下旬には連日事務局に寄稿があり、約六十名の方々から玉稿、資料が送り届けられました。寄稿下さった皆様の熱意とご協力を感謝致します。現在、委員会では集まった原稿・資料をもとに、各年度の史実と寄稿者の随想の併載、写真の選択を始めており、大日本印刷(株)年史センターに原稿の持込みを開始しております。

次に費用ですが、当初の計画では発行後ご寄附を、一、二万円お願いする予定でしたが、印刷会社への支払は、発行時三分の二、残金は二ヵ月以内に支払う必要があることから、皆様のご寄附を完成前にお願ひせねばならなくなりました。予定を変更して恐縮ですが、改めて皆様に事務局より依頼状が届きましたら、ご援助の程お願ひ申し上げます。(五十年史編纂委員会・事務局)

昨年度発行予定のOB名簿は若干遅れましたが、五十九年度OB総会(24)までに発行するよう努力しております。

# 短歌

(全日本インカレ・江の島にて一句)  
炎天のヨット置場に各校の  
たてる校旗が風にはためく

ひるがえる早稲田の旗のそばに寄り  
レース気づかうOBわれも

江の島の遙かな沖に数十の  
帆は集まりて白く輝く

数十の帆の重なりが遠く見ゆ  
沖のレースは熾烈なるべし

戦いを終えし選手を迎うるは  
拍手と換声の大ききよめき

レース終え艇よりあがる選手らの  
顔は光りて潮焼けをせり

往き来する若者たちはたくましく  
われを圧する夏の群像

大き帆をたたむ二人は新人か  
先輩の声のままに従う

レース初日三位なれどもなお三日  
ありという声の明るく聞ゆ

明日に備え艇の整備に余念なき  
若者たちをさわやかに見つ

右の短歌は、新名敬一先輩(昭14年卒)  
より左記のお伝よりと共に送稿されてま  
りました。 舟岡 正

『拝啓 毎日の残暑いささかこたえ  
ます。』

先日、江の島の全日本学生選手権  
を午後から一寸のぞきました。たし  
か二十五日だったと思いますが、O  
Bの方にはだれもお会いできません  
でしたが二時間程岸壁におりました。  
その際感じたことを短歌にまとめ  
ました……略。

### ◎58年度会費納入者(12/19現在)

⑭は卒業年度。前納者、前年度支払者  
を含む(敬称略)

- ⑭山田 新名 山田直 増井⑮田原  
永元 植松 永田 間瀬⑯堀 堀江 山  
下 平野⑰大井⑱古市 金子 田島⑲三  
田⑳坪田 林㉑久保田 久留島 横川  
清水㉒加藤㉓宮本 湯沢 新井㉔漆原  
渡辺 小俣㉕小泉 木本㉖石井 天神  
村瀬 円谷 佐伯 大塚㉗金沢 米田  
石川 木田晴 安藤㉘是枝 岩本 千葉  
松本 遊佐 浜田 浅山 高島㉙杉山  
舟岡 佐藤 菅田㉚天神 中田 山崎㉛  
清水 加藤㉜岡村 北河 高橋 山品  
並木 関根㉝大野 山田 菅山㉞土肥  
吉川 原 吉田㉟石川 角川 伊藤㊱上  
居 山崎 関根 安藤 木村㊲古内 宮  
田㊳大 木内 杉山 山中 斉藤 松島  
④後藤 小坂㊴金刺 石合㊵尾木㊶山内  
④⑤北島 大矢木㊷武藤 斑日㊸三枝㊹杉  
井㊺林㊻恒川㊼大嶋㊽川瀬 角田㊾辛武  
大原 渡辺㊿坂爪⑤中島 橋⑥石滑  
小池 長瀬⑧黒田 以上一三二一名  
合計百二十三万円

### ◎58年度奉加帳・寄附金一覽12/19現在

- 口座振込、全日本の奉加帳の合計金額  
⑭は卒業年度、( )数字は単位千円。  
⑭新名⑮増井⑯永元⑳永田⑰⑱  
堀江⑲⑳久留島㉑坪田⑳㉒新井⑳㉓伊

- 井⑳⑳村瀬⑳ 円谷⑳⑳女藤⑳ 金沢⑳⑳  
米田晴⑳ 石川⑳⑳岩本⑳ 松本⑳⑳  
高島⑳ 千葉⑳ 鈴木⑳ 遊佐⑳⑳ 浜出  
⑳⑳ 浅山⑳ 佐伯恵三夫人⑳⑳杉山⑳⑳  
舟岡⑳ 日色⑳ 鈴木⑳ 菅田⑳⑳武村  
⑳ 天神⑳ 山崎⑳⑳清水⑳ 松井⑳  
加藤⑳⑳北河⑳ 並木⑳⑳菅山⑳ 山田  
⑳⑳上肥⑳ 原田⑳⑳石川⑳⑳伊藤秀⑳  
⑳⑳角田⑳⑳中島⑳ 倉谷⑳⑳ 木村⑳ 山  
崎⑳⑳大⑳ 齊藤⑳⑳ 杉山⑳⑳ 松島⑳⑳④  
森⑳ 齊藤⑳⑳ 頼⑳⑳佐々木⑳ 千津井  
⑳⑳ 豊出⑳⑳④稻生⑳ 伊藤⑳⑳④北島⑳④  
斑目⑳ 武藤⑳⑳ 原田⑳⑳一菊池⑳⑳ 藤田  
⑳⑳町田⑳ 山田⑳⑳林⑳⑳赤松⑳⑳大  
嶋⑳⑳岩崎⑳⑳光武⑳⑳ 野口⑳⑳ 只出⑳⑳  
橋本⑳⑳ 大原⑳⑳④松下⑳⑳一北川⑳⑳市村  
⑳⑳ 伊熊⑳⑳④風間⑳⑳ 中島⑳⑳ 橋⑳⑳ 戸  
枝⑳⑳ 川上⑳⑳④小池⑳⑳ 長瀬⑳⑳ 芝崎⑳⑳  
⑳⑳渡辺⑳⑳ 黒田⑳⑳ 鎌田⑳⑳④大丸東京  
店⑳⑳ 以上 合計百九万三千元  
◎有難とうございました。ご協力感謝  
いたします。

## 早稲田ヨットクラブ総会 ●新年会開催のお知らせ

恒例の新年会を兼ねたOB総会を左記  
の通り開催致します。OB諸兄には、ご  
多忙中とは存じますが最拜ご参加下さい。  
昭和五十九年一月  
早稲田ヨットクラブ  
理事長 杉山博保

- 一、議題  
①昭和五十八年度決算報告  
②昭和五十九年度事業計画  
③ヨット部新監督の承認  
④ヨット部新役員承認

### ◎五十年史編纂経過報告

昭和五十九年一月四日(日)四時~七時  
三、会場  
永楽クラブ(東京・丸ノ内野村ビル  
七階・☎〇三(二三二一〇七三五)  
四、会費 五、〇〇〇円  
同封の返信ハガキは、一月二十五日まで  
にお出し下さい。 以上

### ◎58年度就職状況

佐々木陽 (商)日産自動車、小野芳  
夫(政)住友信託銀行、市井久也(商)  
昭苑都市開発、黒田住宏(専理)揖斐川  
工業、板東義之(社)松下興産、小出昌  
一(二文)西武百貨店。

### ◎59年度ヨット部新役員(予)

主将 小山良仁(二文)  
主務 梅原浩一郎(政)  
副将 瀬川洋二(教)  
学連

### ◎58年度関東学生・秋期大会

58年10月22日~30日まで森戸海岸沖で  
行われた結果は左記の通り。  
総合・①日大 ②関東学院 ③明大  
④中大 ⑤慶大 ⑥早稲田  
四七〇級・①日大 ②早稲田 ③関東  
学院 ④明大 ⑤慶大 ⑥中大  
S級・①日大 ②中大 ③関東学院  
④明大 ⑤法大 ⑥東大 ⑩早稲田

### ◎59年度会費とご寄附のお願い

早稲田ヨット部への援助と、私た  
ちのクラブ運営の為、本年も年会費  
一万円と何分のご寄附をお寄せいた  
だきたくお願ひします。

昭和二十七年 (早風 進水)  
早慶戦のすなイブ陣

史実レポート  
の一部を抜粋

この年は、戦後の早稲田ヨットの念頭であったクルーザー「早風号」が進水し、A級10隻、S級3隻、L級1隻を保有し、選手層は厚く、部員数も、夏の新人合宿時には50名を越える大ヨット部が完成したのである。

主将石井章夫は、この大ヨット部を名実共に日本に仕上げる重責を担い、副将天神保彦、マネージャー門谷忠等の協力のもと、猛練習によりヨット部強化に努めた。

一方この年は、ヘルシンキオリンピックの年であり、わが早稲田も、技倆に於いては、候補選手を出せる実力を持ちながら、日本ヨット協会の選考基準の一つである、体重制限(15貫56kg)に満たず、チャレンジが出来なかったのである。同オリンピックに、監督兼コーチとして参加した、小沢吉太郎氏が「舵」で述べている所によると、

「私はベルリン大会の経験から、選手は体力の点で19貫以上の体重の持ち上であることが理想であると思っていたが、この基準によって一流選手をとうとうとすると、現在日本では僅か7、8人しか選べないので、15貫以上にまで下げて、その基準によって各地方協会から推薦を受けることにした」となっている。

◆第15回早慶対抗戦

一 早大3連敗、通算6勝9敗一  
(5月3、4日 於横浜)

A級	早大	120点	慶大	97点	各5艇
S級		36点		79.5点	各3艇
総合		156点		一七六・五	

早稲田のA級は、石井、天神、門谷、豊田、佐伯、河村らの名手揃いであり、慶応の武田(27年度全日本チャンピオン)田辺、石井(ローマ・東京オリンピック出場)高原らに一步もゆずれぬどころか、上記の如く快勝しているのである。

主将石井は、およそ練習不熱心の如く周囲には見えた。レース前一週間、まるで海に出ず、他の部員に練習させていた。そして当日、黙ってトップでフィニッシュするのであった。寡黙の人「門谷も特に光っていた」(スポーツ毎日)。各レース、上記メンバーが常に1、2位を占めていた。強風と高い波の中のレースであった。

一 玉砕のスナイプー  
S1号艇とS7号艇は老朽化激しく、廃艇の方針を決め、スナイプ2艇を新造することになった。27年5月の早慶レースに間に合わせるべく、墨田川造船所へ発注した。発注に際して次の仕様が決められた。

- (イ) ボトムのは、S16号艇と同じにする。
- (ロ) 軽量化する為、デッキのアルルをやめ、ウォーター・ブレークを長くとり、コクピットを大きくした。
- (ハ) デッキのキャンバス張りベンチ塗りをやめて、板張りニス仕上げとする。

(イ) マストは、一番太い所で50%、この強度を補う為、ジャンパーステイをとりつける。オンデッキマスト。

(ロ) センターボードは、差し込み式とする。S16のセンターボードの横ゆれが激しかったのにこりた為である。(差し込み式が流行し始めた時であった。)

(ハ) この二艇は、色々の工夫、検討の末建造されたが納期が遅れ、横浜に持ち込まれたのは、早慶戦の前日であった。トラックで陸送されて来た。そしてその夕方、ポンドの中で少し帆走しただけで、レース当日を迎えたのである。

レース当日、強風。プロローは12~15メートル。スナイプは二段リフト。S1号艇は村瀬、米田(傍組)。スタートラインまで行ったが、完全帆走が出来ない。スタートの合図。メインセイルを引き込む。その瞬間、マストが三つに折れた。スタートラインを越えないまま、無惨な棄権。

第2レース。オンデッキマストを立教大学から借り、纏装してみたが、デッキにアルルが無い為、サイドステイのバランスが悪く、マストがしななってリサイドステイにくっつく位になり、レースにならなかった。第一日の2レースを終り、マストホールをあけて、貫通マストに急拠改造した。マストホールを切る村瀬は泣いている様だった。マストを今度は法政大学から借りた。

しかし、第3レース、このマストは逆に曲ってウエザースイドステイにくっついて、曲った棒にセイルがくっついてい

るだけ、という状態になりレースにならなかった。II、III、IVレース共、借りもののマストを折らない様、ソロン口走っただけであった。この結果が、K七九・五~W三六である。

慶応が勝ったというより、早稲田の一人負けであった。未だ貧しい日本の、未だ貧しい早稲田ヨット部で、この時のスナイプデザイン挑戦は、余りにトバク的であった。これでよい筈と思っただけに、当日の風は余りに苛酷であった。強風の早稲田が、強風でバラバラにされた。

早慶レースを終り、早稲田の学生は坊主になった。その中に見えない坊主頭があった。墨田川造船所の戸田孝昭氏であった。戸田氏の横で、大原セイルのオヤジ(大原弘山氏)が泣いていた。

早慶戦はこの年、岡本造船所村田川造船所の闘いであり、又セイルでは、大原対水野の闘いでもあったのである。その時学生たちは、その実験者であった。大原のスナイプのセイルは、評価を受ける以前の状態で早慶戦を終ってしまった訳で、大原のオヤジの胸の内は切なかつたであろう。

尚S1号艇で金沢、松本が、この年9月に関東チャンピオンになっている。

◎理事会・近況報告  
①十一月加藤監督より次期監督として、五十六年卒風間利也君が紹介されました。但し若年のため今期、杯は総監督として加藤OBが面倒をみる予定で、次回OB総会にて正式決定を致します。  
②松本OB③卒がハワイ大学ヨット部部長 M.L. Linstone と話し合っている。対抗戦については理事会は大賛成。